

学校坂道

校長だより

2025年(令和7年)9月3日

泣けるということ

「年をとると、涙腺が弱くなる」と聞いてきました。

何歳からのこと？どうしてそうなるの？と、これまで問いたくなることはありましたが、その答えに至ることはありませんでした。

もうすでに、涙腺は弱くなっていると言えるのかも知れませんが…。

さて、わたしの話に少しお付き合いくださればと思います。

わたしには、思い浮かべただけで、いつでも涙が出てくる場面があります。

その内の二つを挙げてみたいと思います。

その一つは、1984年のロサンゼルスオリンピック。

柔道無差別級決勝、日本の山下泰裕選手とエジプトのモハメド・ラシュワン選手の戦い。

山下選手勝利の瞬間です。

山下選手は2回戦の試合中に右足ふくらはぎに肉離れを起こし、退場するときには足を引きずっていました。

金メダルを願っていたわたしでしたが、その姿を見て、とても痛そうで、最高の結果は望めないと思いました。

しかし、山下選手は畳に立ち続け、瞬時の早技で勝ち進み、決勝での勝利に至るのです。

山下選手の幼い頃からかわりのあった方とわたしは出会い、山下選手の人となりをよく聞かされていたことが、わたしの涙の背景にあるように思います。

二つ目は、わが子のこととなりますが、高校2年生の夏、県大会。

3対2、9回裏2アウトランナー1・2塁。一打同点、長打でサヨナラの場面。

バッターボックスに向かう息子。

スタンドの応援は最高潮に達していました。

結果、空振りの三振でゲームセット。

地面に伏せる息子。

音が戻ってきたとき、先輩が息子を抱え上げ、整列させていました。

なぜ、このような場面なのでしょう。

山下選手は、ケガの後、鬼のような形相で戦い続けていました。

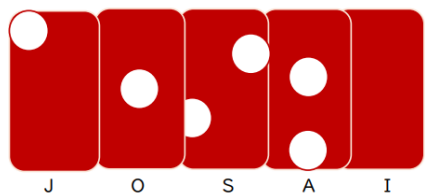
勝手にあきらめかけていたわたしは、申し訳なくなるようでした。

だけど、「やっぱり無理だろう」… こうした思いの繰り返しでした。

決勝では、モハメド・ラシュワン選手は、山下選手の痛めている足を一切攻めることなく戦いました。

山下選手は試合後のインタビューで、涙ながらに喜びを語り、敗者に対する最大の敬意を言葉にしています。

一方、モハメド・ラシュワン選手は、「山下選手の戦いぶりは尊敬に値し、例え、わたしが足を攻めていても勝利には至らなかった。」といった意を述べていました。



学校坂道

校長だより

2025年(令和7年)9月3日

思わず、涙が

息子は、中学校の先輩に誘われ野球部に入部しました。
可愛がられ、頼りにもされているようでした。
「先輩がいたから野球を続けた。」という言葉聞いていました。
部屋に残るグラブ用オイルのにおいや庭土が削られた跡に、その毎日を感じていました。
チャンスの場面。
親としては、「まわって来い」と期待し、体に近い厳しいボールがくると、「当たれ」と思いました。
試合の後に取材を受けたようです。
「先輩に申し訳ない…」の続きの言葉は出てこなかったようです。
先輩と過ごした毎日が想像できました。

さて、この二つの場面に共通しているのは…、わたしの感情が短い時間の中で目まぐるしく移り変わり、何より感情移入が半端なかったことだと思います。

日々、目の当たりにする場面に心動きます。
年を重ねてくると、色々なできごとに心動いた経験が増えます。
こうした蓄積によって、また巡ってくる違う場面に、それまでの自分の経験を想起したり、重複させたり、他者の気持ちを想像したり … それを繰り返しているように思います。
時に、経験したことのない新たな感情に出会ったりもします。

「年をとると、涙腺が弱くなる」

わたしには、こどもたちのがんばる姿をたくさん見ることができる幸せがあります。
精一杯の声で友達を応援する姿。
体全体で喜びやくやしさを表す姿。
家族や友達に感謝の気持ちを語る姿 などなど。

わたしは、常々、「こどもたちに涙を流させたい。」と思っています。
悔し涙を…。できればうれし涙を… と。
今後も、そんな学校生活をこどもたちが送れるように環境づくりをしていきたいと思っています。

📖 最後まで読んでくださり、ありがとうございます。

Change the world by being yourself. ～ 自分を変えることで世界を変えよう ～